



「寛政の改革」を断行した 老中松平定信の晩年の日記

若くして徳川幕府老中首座・將軍補佐となり、「寛政の改革」を断行した松平定信（1758～1829）が白河藩主致仕の日を以て起筆、以後、逝去前年の文政11年末まで書き続けた17年間の日記が『花月日記』である。

定信は、退隠後に住居を江戸築地の藩邸下屋敷「浴恩園」に移し、自ら「樂翁」また「花月翁」と称した。本記からは清雅風流の生活を送る定信の姿が浮かび上がるほか、生母や妹・親類等の危篤または死没にあたっての沈痛な心情、將軍家への深謝・敬愛の念なども随所に記される。また、優雅な擬古文でつづられた文中には、その時々に数多の和歌が詠み込まれ、さながら歌日記の態をなしている。

本記は、まさに定信の人となりを克明に伝えている。

〔収録〕

文政9年（1826）正月～

文政11年（1828）12月

解題

A5判上製・函入・312頁

定価 18,700円（本体 17,000円+税）

ISBN978-4-8406-5226-1 C3321

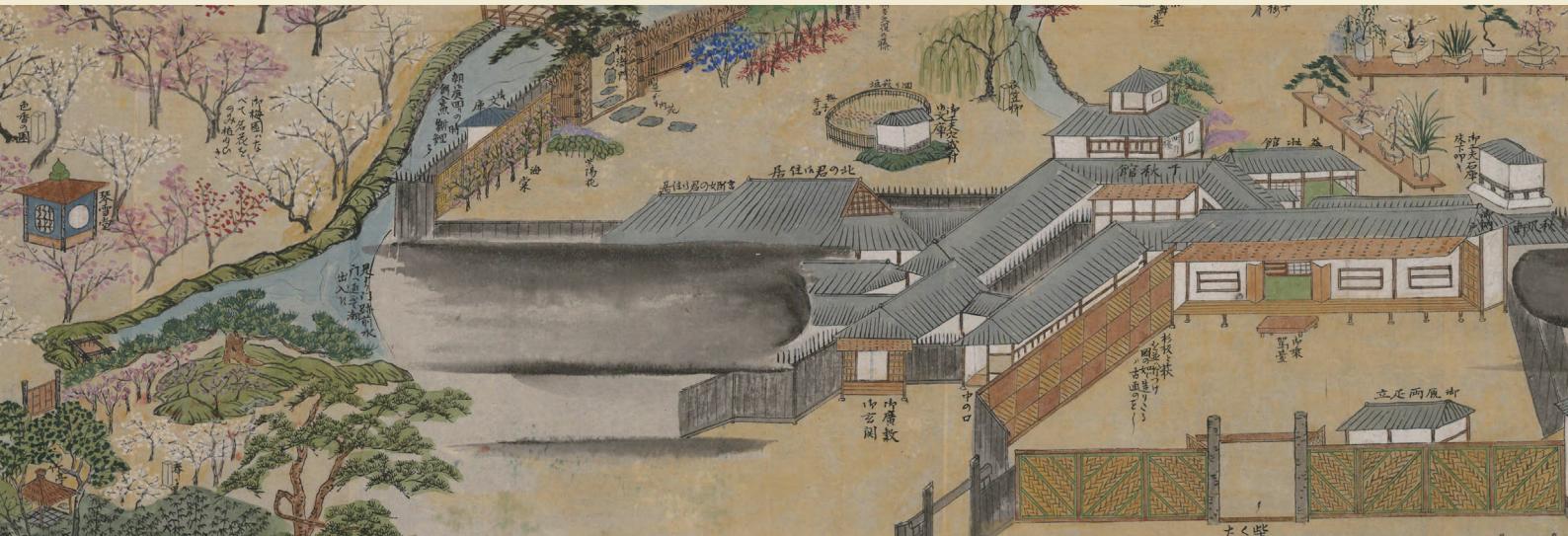


花
月
日

記
第六
(全六冊・完結)

史料纂集古記録編 第二二六回配本
岡鳴偉久子・山根陸宏校訂

二〇一五年十二月刊行予定



画像出典：国立国会図書館デジタルコレクション『江戸浴恩園全圖』(<https://dl.ndl.go.jp/pid/9367513>)

八木書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8

TEL: 03-3291-2961 / FAX: 03-3291-6300 pub@books-yagi.co.jp

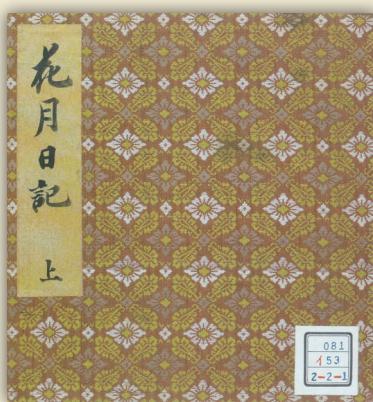
本書の底本は、天理大学附属天理図書館蔵の松平定信自筆『花月日記』である。本日記には、その本文の完成度と淨写の精度によって、草稿本・淨書本・上写本の三種が伝存している。今回の翻刻に当たっては最終の清書である上写本を使用し、欠損部分については前段階の淨書本を底本とした。従来、『天理図書館善本叢書和書之部』79に文化9年の影印本が、また木村三四吾編校『花月日記』文化9年・10年（私家版、1986年）の活字本があるが、それ以降の年代も含め、このたび初めて「史料纂集」シリーズとして全文を翻刻。全6冊をもって完結となる。

幕政を離れた日々の情景

日記中によく登場する人々は定信の子息や娘たち、近親、ごく親しい友人たちである。息定永とその正室綱子、次郎である定栄（真田家養嗣子、後の真田幸貫）、各大名の正室となっていく娘たちとその夫、定信の後室隼、さらに姉・妹・実母……。

ごく近しい友人として折にふれて記されているのは「月の君」とこと堀田正敦、「林の君」とこと林述斎である。この二人との「底意なき交じらい」「心隔てぬ友垣」の様には何よりも美しいものがある。時々には内藤信敦・松平輝延・牧野忠精・酒井忠進・松浦静山…、また「寛政の改革」以降も定信の政治基調を維持したいわゆる「寛政の遺老」松平信明などの名がみえる。

幕政を離れ、さらには藩主も退任して後の定信ではあるが、助言・教導を求めて来訪・対面を願う者は絶えなかった。日記中には多彩な人物の名が見える。様々な大名家当主、世子、藩の問題を抱えた家老達。また、当代の文化人、北村季文・市川米庵・屋代弘賢等との交流、時に杉田玄白・頼山陽・村田春海・塙保己一等の名もあがる。



花月日記 文化九年上冊表紙 （天理大学附属天理図書館所蔵）

定信の思いと心情の吐露

定信は、日記中には幕政に対する批判は厳に慎んでいる。繰り返されているのは当代の御代の豊かさに対する賛辞と感謝である。しかし、やはりその中には、定信自身の思い、考え、また志といったものも、何かの折には現れてくる。

稀に激越な口調となるのが、当時の世情、特に、ロシアその他からの異国船来航に対しての海辺防備への不安と焦燥である。定信は、文化7年、幕府長年の懸案であった江戸湾警備の一環として房総半島警備の任に就く。自ら望んでの任であったようだ。文政6年3月、桑名への転封と共に同任も解かれるが、その時『花月日記』には、その間に藩で整えた防備のための大筒「一貫目六尺筒」以下225挺が一つ一つ記されており、定信の心情が思われる。

種々の批判はあるものの、定信の行った「寛政の改革」は、財政改革という点では確かに大きな成功を収めた。その安定を基に、文化文政時代と称される江戸期における文化隆盛の一時代が到来する。「寛政の改革」の主導者である定信は、この文化文政期における第一流の文化人でもあった。同時に、文化面での庇護者的な役割を果たしていることも、当日記には具体的に見て取れる。

花月日記 既刊

A5判上製・函入

第1 文化9年（1812）4月～文化10年（1813）12月

300頁・定価17,600円（本体16,000円+税）

ISBN978-4-8406-5209-4

[2020年12月刊]

第2 文化11年（1814）正月～文化12年（1815）12月

332頁・定価18,700円（本体17,000円+税）

ISBN978-4-8406-5212-4

[2021年12月刊]

第3 文化13年（1816）正月～文化14年（1817）12月

260頁・定価17,600円（本体16,000円+税）

ISBN978-4-8406-5214-8

[2022年7月刊]

第4 文化15年（1818）正月～文政4年（1821）12月

328頁・定価18,700円（本体17,000円+税）

ISBN978-4-8406-5216-2

[2023年5月刊]

第5 文政5年（1822）正月～文政8年（1825）12月

312頁・定価18,700円（本体17,000円+税）

ISBN978-4-8406-5220-9

[2024年6月刊]